

プライス・ダウン

10月	176	-
11月	(1)	
10月	3127	- 0.5%
11月	3579	
10月	2710	+14.0%
11月	3728	
10月	3559	1.0%
11月	3,118	2.6%
10月	1,589	1%
11月	1,724	0%
10月	1,737	+
11月	1,436	+ (円)

100	199	1800
188	216	1700
8	231	250

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。
なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 価格破壊 (プライス・ダウン)

¥880

昭和54年3月30日 四六判・2刷発行

著者 しろ 城 山 三 郎
発行者 小 保 方 宇 三 郎
印刷者 盛 照 雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京 6-115347 電話 東京 (942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (関川製本)

© Saburō Siroyama 1979

(分)0-0-93(製)92051(出)2271(0)

Printed in Japan

價格破壞

|| 目次

消し屋	賭けの行方	スタミナ源太	屠殺	犠牲者	強損強栄	土壇場	くさる	大晦日
99	82	70	57	44	38	27	13	7

展開	一進一退	薄明	摘発	分断作戦	感傷旅行	汚ない取引	二つの事件	謀反
219	212	199	179	171	147	134	121	108

装
幀
荒
木
哲
夫

価格破壊
プライス・ダウン

城山三郎

大晦日

その男は、いきなり車の流れるまっただ中へとび出てきた。

「危ない！」

運転者は叫ぶと同時に、急ブレーキを踏んだ。車は高いきしみの音を立て、つんのめるようにして止まった。後続車も急ブレーキ。クラクションが、わめくように鳴る。

男は、車の方を見向きもせず、まっすぐ道を渡り切った。大柄で眼鏡をかけ、少しばかり猫背の男である。両手に大きな風呂敷包を下げている。

「ばかもの！」

はらにすえかねて、運転者はどなった。信号は、たしかに青であった。ということ、男にとって赤のはずで

ある。その証拠に、他の歩行者たちは、道の両側に群れて待っている。中には、あっけにとられて、男の顔を眺めている人もある。男の振舞いは、気がいい沙汰ともいえた。

運転者は、車を歩道に寄せて止めると、歩いて行く男を追った。文句を言わずには納まらなかったし、男の横顔に見おぼえがあった。

小走りに追って、肩をたたいた。男の顔がゆっくりふり返った。

「おう、赤坂じゃないか」

人なつっこい眼で、眼鏡越しに笑う。

「なんだ、矢口か。どこか似てると思ったが」

「十年、いや、十五年ぶりかな」

「十五年ぶりも何もないぞ。危うく轢き殺すところだった」

「ああ、あれか」

「あれかとはなんだ。赤信号でとび出しておいで」

赤坂はそう言うってから、矢口の顔を見直した。

「いったい、おまえ信号を見たのか」

矢口は、笑顔のまま答えを濁した。

「どうして信号を見ないんだ」

「……うん」

「急いででもいたのか」

「……うん」

「はっきりしろ。まるで、いつも信号を見んような言い方だな」

「……うん」

「うんうんばかり言って、しょうがないな」

赤坂は、なお、まじまじと矢口を見た。二人はN大学経済学部同期生であった。そのころの面影をさぐろうとしたのだが……。

「おまえのようにおとなしかった男が、あんなむちゃな横断をするとは何事だ。しかも、三十五歳にもなつて」

「……」

「なぜ、そんなむちゃをする。危ないとは思わんのか」

「思わん」矢口は、にやりと笑って、つけ加えた。「おれはもう死に神とは縁を切ったんだ」

「そういうえば、フィリピンでひどい目に遭ったそうだな」

「何度も間一髪で助かった。だから、いまはもう何もこわいものがない。絶対に轢かれないという自信がある」

「変なやつだな」赤坂は矢口の風呂敷包に眼をやり、「ど

こへ行く。乗せて行つてやるぞ」

「この二町ほど先だ。クスリ屋をやっている」

「この先のクスリ屋？　すると、あの安売りをやってる……」

矢口はうなずいた。

「あの店をおまえがやってるんだって」赤坂は声をたかぶらせた。「ひどい安売りで、業界では物議をかもしてるそうじゃないか」

「客はよろこんでるよ」

「安く売りや、客は来るだろう。しかし、クスリは安く売っちゃいかん商品なんじゃないのか」

「再販売価格つまり小売値をメーカーで一定にきめて売らせることを許されてる商品だ。クスリだけじゃなく、洗剤など七品目ある」

「それを安売りしては、ルール違反じゃないか」

「高く売っていいというので、安く売ってはいいかぬと法律は言っていない。メーカーの力で強制しているんだ」

「メーカーが怒るだろう」

矢口はうなずき、風呂敷包を指さした。

「だから、こうやって、はるばる仕入れてくる」

「神田あたりからか」

「いや、仙台だ」

「仙台？ 東京にないクスリなのか」

「あるにはあるが、東京の間屋は卸してくれん。『矢口に売るなら、以後、出荷をとめる』と、メーカーから圧力をかけられてね。だから、地方の間屋へ現金を持って買い出しに行く」

「それにしても、仙台は遠過ぎるじゃないか」

「水戸で買い、宇都宮で買い、福島で買い、いや、買えなくなつて、だんだん遠くへ行かねばならなくなつた。

どこでも一度は買えるが、二度と買えないからだ。うちで売ったクスリの箱の製品番号から、メーカーは流通経路をつきとめ、その間屋をおどす。だから、二度とは売ってくれず、次の町へ行かねばならなくなる。西は京阪神がだめになり、岡山まで買いに行く」

「その先はどうなるんだ」

「北海道へでも九州まででも仕入れに行くさ」

「その先は……」

「さあ」

矢口は弱々しく笑つた。

「やっぱりむちゃな商法だな。どのクスリ屋でも、やらなかつたわけだ」

「うん、だが、おれはやりぬいてみるよ」

赤坂は応える代わりに、風呂敷包を車につみ、矢口を助手席にすわらせた。

車は走り出した。大晦日^{おひめさか}でスモッグの影響のないせいか、空は水色にひろがり、冬には珍しく、日射しが明るかった。プラタナスの落ち葉が、たのしそくに舗道を走っている。

歳末売出しの看板だけにぎやかな店、いまだにジングル・ベルのレコードを鳴らしている店。そうした店々の並ぶ向こうに、客が黒く群れている店が見えてきた。

「なるほど、よくはやっている」

赤坂は口をあけながら、車をとめた。降り立った矢口に風呂敷包を渡してやり、

「まあとにかくがんばるんだな。やがて仕入れで行きづまるだろうが、そのときまでは、がんばってみるさ」

急に冷え冷えした口調になって言うと、車のドアを音を立ててしめ、走り去つた。

矢口は、突っ立ったまま見送っていた。赤坂の口調の変化が気になったが、すぐ思い当たつた。

赤坂は、大手の家庭電器メーカー・平安電器につとめていると聞いていた。電器製品の業界でも、再販価格に

似たメーカーの指示価格が守られ、安売りはいやがられている。クスリのことを他人事（ひとごと）と聞けなくなったのではないだろうか。

矢口は客の人ごみを分けて、店の中へはいっていった。五人の店員の姿も客にのみこまれ、二台のレジスターが休みなく鳴り続けている。

「おかえりなさい」

店のいちばん奥の方から、妻の奈津子（なつこ）が笑って迎えた。六カ月でややふくらみはじめたお腹（なか）をかかえ、応援に出ている。「がんばれ」という思いをこめて片手をあげ、矢口は二階の小さな部屋に上がった。風呂敷包をとき、はるばる仕入れてきたばかりのクスリの仕分けにかかった。

「社長、××はありませんか」

店員が顔を出す。ついでに仕分けのすんだクスリをどんどんおろしていつてしまう。「もっと仕入れておくんでしたな」と、ぐちを言う店員もあった。

矢口の店では、クスリだけでなく、一部の食料品や日用雑貨も置くようになっていたが、それが次々に売り切れていつていくのだ。

勘定係（かんてい）が「指が痛くて」と、訴えにきた。矢口は、叱（しか）

りつけるようにして、レジスターのところへ戻した。

レジスターが鳴り続けているうちに、日は暮れた。

だが、客足はまだ続いていた。他の店々が戸を閉じると、矢口の店ならやっているだろうと、足を向けてくるのだ。このため、終業時間を十時までのばした。

最後の客の出るのを待って、四枚のガラス戸を閉め、カーテンをひいた。矢口夫婦と五人の店員、その七人がそのときになって、はじめて店の中をまざまざと見た。

「社長！」

あきれたとも、感激したともつかぬ声が漏れる。

仕入れてきたばかりのクスリを含め、全商品が根こそぎといつてよいほど、きれいになくなっていった。わずかに残っているのは、歯ブラシが三本とビーナッツ二袋だけ。パッタの大集団が通り過ぎると、畑には緑の色さえなくなってしまうというが、客の去ったあとには、ただがらんとした三十坪のひろがりがあるだけであった。

二台のレジスターが打ち出した売り上げの総計は、五十二万円。その種の店では、売り場一坪につき一万円の売り上げが理想とされていたのだが、その目標を倍近く上回ったのだ。誰の眼も輝き、顔は紅潮していた。

矢口は、二階にあった一升壺（びん）を持って来させ、残つて

いたピーナッツ二袋を肴に、コップ酒で全員乾杯した。
「みんな、ごくろうさん」

それだけ言うと、矢口は不覚にも声がつまった。

東京西郊のその住宅地でクスリの安売りからはじめて八カ月。とにかく持ちこたえ、やりとげた、そして客に支持された——という思いが、胸に痛いほどであった。

「社長、来年はもっと思いついて仕入れてください」

「お客さんに品切れを謝るのは、もうたくさんです」

「それに、もっと品目をふやさなくちゃ。生鮮三品も、やるうじゃありませんか」

顔の赤くなった若い店員たちが、口々に言う。

矢口は、うなずきながら、黙って聞いていた。

肉・野菜・魚を加え、スーパーらしい体裁にひろがってゆくのは、矢口の希望でもあるが、もともと店の柱はクスリの安売りである。ところが、クスリ・メーカーの太い腕がすでに東にも西にもびて、矢口を扼殺しかかっている。クスリ仕入れの破局が近づいている。そのことを、彼らはどの程度に感じているのだろうか。

大入袋ともいうべき手当てを渡し、矢口は五人を家の外まで送って出た。すぐ先の高架線の上を、明るい灯をたらねた国電が走って行く。初詣でに出かけるのであろ

う、日本髪姿のシルエットが見える。空には星がきれいであった。

矢口の耳には、レジスターの音がまだ残っていた。りんりんというその音は、ひとつひとつ「がんばれ」という消費者の声に聞こえもした。

家の中に戻る。二階の部屋で、奈津子はふとんを敷いていた。

「あついお茶でもいれましょうか」

「うん、たのむ」

そのとき、かすかに鐘の音がした。奈津子は手をとめ、耳をすました。三つまで聞いたところで、

「もう一年経ったのね。今年はとくに早かったわ」

年初、矢口はそれまでつとめていた旧財閥系の鉱山会社をやめた。ミスさえしなければいいといった会社づとめが苦痛になっていた。それに、構造的な不況で、会社の前途は暗かった。

一度は死んだ体である。思いついて爆発した人生を送ってみたい。そう思うと、やもたてもたまらず、たまたま知人の薬剤師が投げ出そうとしていた店をひき受け、独立した。ありきたりのクスリ屋でなく、商人として徹

しようと思った――。

「サラリーマンの奥さんのつもりで、のんびりお嫁入りにしてきたのに、アテがはずれてしまつて」と、奈津子は冗談めかして言い、「でも、これでいいんだわ。きつとうまくやってゆけると思うわ」

不安があるから健気に言つてみせた格好であつた。

奈津子は茶をいれた。除夜の鐘が遠く鳴り続け、また国電のひびきがした。

「結婚してもう五年目になるのね」奈津子は氣をとり直したように言つた。「お見合いのとき、わたしあなたを見て、うれしかったわ。いい人に会えたと思つて」

「……うん」

「あなたはどうかだつた？」

女はいつまで経つてもこれだと、矢口は苦笑し、

「そんなこと、いまさらどうだっていいじゃないか」

「おねがい、おっしゃつてよ」

「よさそうだ、と思つたな」

「あらあら、その程度？」

眼は一重瞼だが、きらきらして、やや受け口の唇。
愛らしく素直そうな娘だと思つた。

「どこまでも、ついてきてくれそうな女だという氣がし

た」

「それはもちろんよ」奈津子は膝を寄せてきて、「あなたに長生きしてもらつて、孫にたくさん囲まれて」

「おいおい、子供はまだこれからというのに」

矢口は、奈津子のお腹のやさしく息づいてるふくらみに眼をやつた。店をはじめてからは年中無休。夜もおそくまで追われて、妻の体をしみじみ眺めるのは、何カ月ぶりであらうかと思つた。

矢口の視線に氣づいて、奈津子はうすく顔を染めた。

「久しぶりのお休みですものね。……大丈夫よ、そつとなら」

鐘の音は、いつか鳴りやんでゐた。

考えようによつてはお先まっくらの新年が、おだやかに明けていった。

くさる

正月三日の夕方、矢口はジャンパー姿に小さな手提げひとつ持って、家を出た。

手提げの中には、風呂敷をたたんだのが二枚。そして、空気枕、洗面具、睡眠薬など。岡山まで夜行で行って、夜行で帰ってくる予定である。

「駅まで送らせて」と、妻の奈津子がついてきた。「二人並んで歩けるなんて、こんなときしかないんですもの」お腹が目立たぬようにと、和服にコート。そんな姿が新鮮であった。

少し冷たい風が出ていたが、相変わらず空はよく晴れ、西の方に小さく富士の白い頭が見えた。街には、日本髪の女や酔っ払いが行き交っている。メ飾りをつけた年始めの車が走る。街全体にお屠蘇気分があり、矢口のジャンパー姿が不似合いであった。

M駅に近い商店街では、ところどころ店をあけていた。「うちは、売ろうにも売る品物がないんですものねえ」と、奈津子が苦笑する。矢口は岡山までクスリの仕入れに行くが、四日は店員たちが早朝から手分けして、食料品や雑貨などを仕入れることにしている。

「あんなに売れてしまうなんて」

奈津子の臉には、大晦日の興奮がまだ残っているようであった。

だが、奈津子はすぐ顔色を変え、矢口の袖をつかんだ。「ね、あの人、わたしたちの方を……」

小間物屋の店頭で、主人らしい男が腕組みして、こちらを眺めていた。奈津子は矢口の体のかげに回り、

「この辺へ来ると、みんなにうらまれているような気がするわ」

「誰にもうらまれる筋はないじゃないか。安く買えて、お客さまはよろこんでいる」

「お店屋さんが問題よ。きっと、ひびいてるわ」

「気にすることはない。うちはうるさい宣伝してるわけじゃなし、悪い商品を売ってるわけでもない」

「それがそうはとらないのよ」

「なんだって」

矢口は道の真ん中で立ち止まった。大きなその体を奈津子は押し出すようにして、

「うちで売ってるクスリがインチキだという評判が立ってるんですって」

「ばかな。どこにでも売ってるクスリじゃないか」

「でも……。うちのに限って、いまに摘発されるだろうって。お客さんで教えてくれた人があるの」

矢口は首をかしげた。中傷である。その種の妨害は覚悟していた。ただそれがどこまで力を持つか、ただの噂にとどまっているのだろうか。様子を探ってみるか。それとも、そうした時間も惜しんで、突っ走ってしまうか。いつかM駅前に出ていた。信号も見ないで足を踏み出す。

「ほら、また……」

奈津子が前のめりになって、あわてて両手で矢口の腕をつかんだ。

「ちゃんと見て。赤信号よ」

「急がなけりゃ」

矢口は、遠くの空を見て、つぶやいた。

「急がなけりゃ、くさってしまふ」

「何がくさるの」

「なんでもくさる。食料もくさる、家もくさる、人間だってくさる」

「おやおや」

「奈津子は、人間の体がくさるのを見たことがないだろう」

「あら、いやな話」

「体の傷にウジをわかしながら、生きながらくさってゆく兵隊がいた。あそこでは、何もかもくさったな。前の部隊が水牛を殺して食って、土に埋めて行く。おれたちが掘り返して食うときには、もうウジがわいていた」

「やめて！」奈津子は耳をおさえた。眼はお腹をさし、

「子供に悪いわ」

赤信号は永^{なが}かった。よくこんなに辛抱していられると思った。矢口は気が変わった。

「コーヒーでも飲もう」

「あら、急いでるんじゃないの」

「おれひとり急いだところで、汽車は時間まで出やしない」

駅前の新しいきれいな喫茶店は、晴れ着や髪油のにおいでいっぱいであった。ようやく一組の席を見つけ、奈津子はいそいそとすわった。